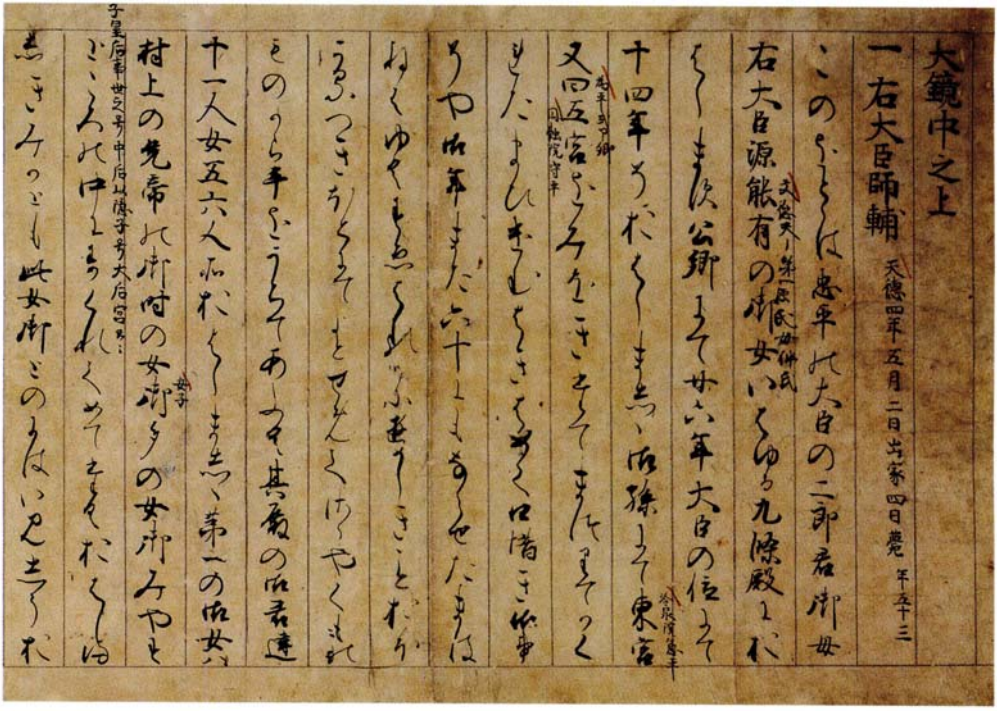
やまとの名品　天理図書館



大鏡　中之上巻（重要文化財）

建久三年写　一軸

縦25.5cm　横902cm

※「陽気」2010年5月号より

貴族社会の勢いが衰える中で、華やかだった過去を振り返り思いをめぐらす新しい文学が登場した。歴史を仮名文で物語風に記した「歴史物語」である。

掲出の『大鏡』に先行する『栄花物語』は王朝貴族、摂関政治の最盛期を築き上げた藤原道長（九六六―一〇二七）の栄華への賛美に終始する。一方、『大鏡』は道長の栄華を語ることを目的としながらも、その権力を獲得していく裏事情、また権力争いに敗れた人々の無念についても描く。歴史の中に生きている人間をしっかり見つめ、鮮明に描き出す作者の姿勢は、『大鏡』の魅力の一つともいわれている。

作者は藤原道長一門の事情を詳細に知り得た立場にいて、歴史や仏教に関心が深く、教養の高い男性貴族であろうとも推測されているが、定まっていない。

文徳天皇の嘉祥三年（八五〇）から後一条天皇の万寿二年（一〇二五）までの十四代百七十六年間の歴史を、天皇・大臣等人物ごとに、主に実際の出来事を見聞きした超高齢の大宅世継（百九十歳、百五十歳とも）が語り夏山繁樹（百八十歳、百四十歳とも）が補足、若侍（三十歳、二十歳とも）が、時に意見を述べる。これらの対話を、そばで聞いていた作者が筆録する形をとる。昔語りの聞き書きという設定は、以後の歴史物語に影響を与え、「鏡物」とよばれる作品群を生んだ。『大鏡』は「鏡物の祖」といわれている。

掲出書は右大臣藤原師輔の条にあたる一巻。建久三年（一一九二）の写。現在伝わる『大鏡』の写本の中で、書写年記を持つものとして最も古い。

（天理図書館　瀬川浩子）

天理図書館のお知らせ　Tel:0743-63-9200　http://www.tcl.gr.jp/
平日（午前9時～午後5時半）　土・日・祝（午前9時～午後4時半）
ただし5月3～5日および31日は休み
（本欄にて紹介した名品の閲覧については係へお尋ねください）

※「陽気」2010年5月号より